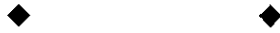


ギャチンカン報告 一頂へー

重川英介 (福岡大学山岳会)

アタック

指先の感覚が薄れていく。標高7,500m。頂上まで最後の拠点となる第4キャンプを出た直後から、指先がしびれ始めた。ザックにつけた気温計は氷点下を示す。体感気温は、氷点下40度にも達していようか。三重構造の手袋を通してさえ、ヒマラヤの寒風を感じる。素手をさらしているかのように、指が凍った。



2005年10月17日午前4時半 (ネパール時間)。第1次アタック隊の登攀隊長、花田博志隊員と私は、第4キャンプを出発した。高所用のプラスチックブーツに履き替え、頂上アタックの準備を整えて既に1時間半。風が弱まるのを待ち続けたが、もうリミットだ。頂上にたどり着き、なおかつ、明るいうちに安全な場所まで戻らなければならない。

「よし、行くぞ」。花田隊員の声にはじかれてテントを出た。エベレスト方向から吹く風がもうもうと雪を巻き上げ、顔をたたく。

痛い。フードを深くかぶり首をすくめる。カメのようにうずくまり、風が緩むのを待つ。圧倒的な自然の力に対し、ただ耐えることしかできない。足元の雪面を照らすヘッドランプの明かりも、強風にかき消されるかのように弱々しく感じる。



午前11時。アタック開始からもう7時間。予定では午前中には頂上に達しているはずだ。それがまだ、岩壁にへばりついている。どこにこの山の



弱点があるのか、ルートが見いだせない。軟らかい雪に、ひざまで埋まる。足が重い。なかなか足が抜けず、焦りばかりが高まる。



福大隊は17年前、同じルートから頂上に挑み、7,800m地点まで達した。頂上までわずかの位置だった。

その時と同じ地点に差しかかっていた。「先輩はこんなところまで来ていたのか」。頭は明瞭だ

5. 海外登山記録

が、体力は限界にきていると感じる。いつになくコンディションが悪く、幾度も足を止めては雪の上に胃液を吐いた。風は弱まる気配はない。空が青い。どこまでも澄み渡った青空は、私たちが歓迎しているのか、拒んでいるのか。

「もう少しだけ。もうちょっとだけ頑張ろう」。言葉を交わす余裕はないが、花田隊員もぎりぎりの状況でそう考えているのが感じられる。

「寒くてもう進めない」「いったん退いて2次、3次のアタック隊に任せた方がいいのでは」ー。

「ここで突っ込まなかったら二度と行けない」。そう奮い立たせるが、振り払っても振り払っても弱気がのぞく。



頂上まで最後の150m。雪交じりの岩壁に、慎重にアイゼンを置き、じりじりと高度を稼ぐ。足元からのぞくのは2,000mも下の氷河。ミスは即、死を意味する。一步、また一步。「ハア、ハア」。酸素濃度は平地の三分の一。歩みを緩めても、息は上がるばかりだ。

壁に打ち込むハーケンをすべて打ち尽くした。これがないと、これ以上登ることは不可能だ。下



降もできない。酸素不足の体には、ほとんど垂直に近いと感じる。スノーバーの頭を叩いて平らに加工し、それを岩に打ち込む。そんな苦闘が2時間半以上続いた。

何とか岩壁を登り終えた。極度の緊張から解放された先に、雪稜がゆったりと延びていた。それまでの急峻さがうそのような、なだらかな横の世界。10mほど向こうの雪面がわずかに盛り上がりそこに花田隊員がいる。

「重川、やったぞ」「花田さん…」。ただ、名前を呼び合い抱き合った。標高7,952mの頂。そこからは、チベットの荒涼とした高原、ヒマラヤの峰々が同じ目線の高さに展開していた。9年前、二人で共に登った世界最高峰エベレストも望める。



「世界で6番目にここに立った」「先輩たちの無念を晴らせた」

喜び。感動。自負。達成感。いろんな思いが駆け巡った。でも、正直、最も感じたのは安心感だった。「もう登らなくてすむ」「休みたい」と心底思った。

精も根も尽き果てていた。史上6隊目のギャチュンカン登頂。その代償は、あまりに大きかった。**帰還**

既に午後2時半近くだった。ギャチュンカン峰7,952mの頂上に立ったのは午後1時40分。ベ-

スキャンプに無線機で登頂を知らせ、写真を撮っている間に時間は予想外に過ぎていた。タイムリミットと決めていた1時を大幅に過ぎている。私たちはまだ、酸素の薄い、極寒の危険地帯にいるのだ。



下降を始めて数十分。目に痛みが走り、視界がぼやけてきた。次第に、青い空と白い雪面の区別をつけられなくなった。雪盲の症状だった。痛くて目が開かない。白く膜がかかったようにしか見えない。

私は眼鏡をしている。日の出後はサングラスに切り替えるが、多分、そのタイミングが遅れたのだ。ほんの数十分のミスだったのだろうが。

気温も急激に低下している。「早く降りなければ…」。気が焦る。だが、もう完全に見えない。同行のシェルパ、タムティンさんに支えられ歩くのがやっとだ。「右足を出して。もう少し左に寄って」

タムティンさんの言葉を頼りに岩壁を降りる。彼も間違いなく疲れている。自身が下りることすら大変な状況で私に付き添っては、まともに動くことができない。酸素ボンベも持たず、こんな高所でビバークするのは不可能だ。早くテントに着かないと二人とも死ぬ。

山は自己責任の世界だ。動けなくなった者は放置されても仕方がない。複数の犠牲よりも一人の犠牲にとどめる。冷徹だが、それが山の鉄則だ。

「置き去りにされても文句は言えない。そうしたら間違いなく死ぬ。頼む。死にたくない」



人の気配を感じた。第4キャンプ(標高7500m)に着いたのか。まさか。そんなに早いはずがない。幻か…。

いや、確かに私の名前を呼んでいた。私の異変を察知したベースキャンプからの指示で、二人のシェルパが救助のためC4を出発。数時間かけて登って来てくれたのだ。

三人がかりで私を下ろし始めた。岩壁帯では私の体中にロープを巻き付け、空中につるした。熱い紅茶を飲ませ、「ビスタリ、ビスタリ」(ゆっくり一緒に下りましょう)と励ましてくれた。

どれだけ経ったのか。シェルパの声がした。「ナウ、ファイナルキャンプ」(今、最終キャンプに着きました)

後になって、テントに着いたのは午後8時近くだったと知った。C4出発から15時間以上行動していたことになる。先に着いた花田隊員は、アイゼンを外さずに待っていた、と聞いた。仮に私に何か起きたとしても、再び上に登る体力は残っていないはずなのに。

登頂の感激を分かち合う余裕もない。目の痛みを耐えて寝袋に入った。

早朝、視力は回復した。しかし、アタック当日、早朝からしびれていた手の指は紫色に変色し腫れ上がっていた。

ギャチュンカン登頂。成功と引き換えに、凍傷を負った三本の指の感覚は二度と戻らなかった。

補足

私は、福岡大山岳部を卒業後、西日本新聞社に入社した。「福岡大学山岳会ギャチュンカン登山隊2005」には、報道要員も兼ねての参加となった。上記の「ギャチュンカン報告一頂へ」は、帰国後、西日本新聞で連載した「遥かなる頂ーギャチュンカン報告」(2005年11月21日～26日)から、アタック当日の様子を描いた部分を抜粋し、今回の資料用に加筆したものである。

ギャチュンカンは、私たちにとって悲願の山だ

5. 海外登山記録

った。1959年、日本人として初めてクーンブ地方を探索した福岡大山岳会がギャチュンカン全容の撮影に成功し、公表した。88年の初挑戦の際には、頂上直下まで達したが、手持ちのハーケンが不足したため撤退する途中、最終キャンプ近くで隊員一人が滑落、遭難した経緯がある。今回の再挑戦は、確実に頂上を狙え、犠牲を出すことなく登山を終えることに主眼を置いた。

ルートは、前回と同じ未踏の南西稜。ただ、C3～C4間のみ、完全に稜通しに岩壁帯を抜ける前回のルートではなく、左手の氷雪壁に新ルートを求めた。前回、あまりに岩が脆く手を焼いたため、それは正しい選択であった。メンバーは、隊長以下日本隊員7人、クライミングシェルパ6人。登山スタイルは極地法、無酸素で、全ルート上にフィックスを張る手法で挑んだ。